フィンランド語の「他動詞 + 第 3 不定詞入格」構文

千葉　庄寿（しょうじゅ）
(東京大学大学院)

e-mail: shoo@tooyoo.L.u-tokyo.ac.jp

フィンランド語には、動詞語幹に派生辞 *-ma/-mä* と格接尾辞を添加して生産的に派生される不定詞 (第 3 不定詞) がある。第 3 不定詞ではヴォイス、時制は表示されない。現代の標準的なフィンランド語では、第 3 不定詞は内格 (INEssive, 接尾辞 *-ssa/-ssä*)、出格 (ELAtive, 接尾辞 *-sta/-stä*)、接格 (ADEssive, 接尾辞 *-lla/-llä*)、欠格 (ABEssive, 接尾辞 *-tta/-ttä*)、そして今回扱う入格 (ILLative, 接尾辞 *-(h)Vn* [1]) という、5 つの格形をとって現れることができる。入格は場所格のひとつで、典型的には名詞につき、「~ (の中) へ」という方向を表わす。

本発表では、第 3 不定詞の入格形 (語幹 + *-ma-an/-mä-än*) が「主語 + 主動詞 (他動詞) + 目的語 + 第 3 不定詞入格形」という構文環境に現れる場合を扱う (この構文を、以下「他動詞+第 3 不定詞入格」構文と呼ぶ)。以下に例文を挙げる [2]。

(1)　*Hän*　***lähett-i***　*minu-t*　[　*hake-ma-an*　*ruoka-a*　*kaupa-sta*　].
(s)he.NOM　send-IMP.3SG　I-ACC　pick up-3INF-ILL　food-PAR　shop-ELA
「彼は私に [食べ物を店に取りに] 行かせた」(Jönsson-Korhola & White 1997:78)

例文 (1) から分かるように、この構文に現れる第 3 不定詞は、「場所や方向を表さず、むしろ目的を含意」し (Hakulinen & Karlsson 1979:384)、「誰かを説得したり、導いたりして行なわせる動作」(Setälä 1973[16]:115) を表わすとされる。また、統語的に、第 3 不定詞の controller (いわゆる「意味上の主語」) は常に目的語である (Siro 1964)。従って、例文 (1) の第 3 不定詞 *hake-ma-an* 'to pick up' の表わす行為の主体は構文の目的語である *minu-t* 'me' であり、構文の主語である *hän* '(s)he' ではない。

本発表では、コーパス [3] から得られた用例に基づき、構文の主動詞として現れた他動詞に着目し、この構文の主動詞として現れる他動詞の中心的なタイプを 3 つ提案し、それぞれの特徴を比較検討する。その後、「他動詞+第 3 不定詞入格」構文をとるが 3 つのタイプ

[1] 入格接尾辞が長母音ないし二重母音で終わる語幹に添加される場合には *h* が挿入される。接尾辞の母音 *V* は語幹末の母音に従う。

[2] 例文及びグロスは形態素をハイフン - で区切り、複合語境界を等号 = で表わす。マーカーの顕在しない語形のもつ情報や、文法情報を複数含むいわゆる鞄型形態素のグロスは、ピリオド . に続けて表記している。表記の簡略化のため、複合語や派生接辞等の形態分析は、本論に差し障りのない限りにおいて省略することがある。また本文中、ことわりがない限り動詞は第 1 不定詞、名詞は主格の形で挙げる。グロスに用いる略号は以下の通り:

&=列挙の小辞; 1,2,3=人称; 1INF=第 1 不定詞; 2INF=第 2 不定詞; 3INF=第 3 不定詞; ABE=欠格; ACC=対格; ADE=接格; ALL=向格; COND=条件法; ELA=出格; GEN=属格; ILL=入格; IMP=未完了過去; INE=内格; NOM=主格; PAR=分格; PASS=受動; PL=複数; PRPT=現在分詞; PSPT=過去分詞; PX=所有接尾辞 (+人称,(数)); SG=単数; TRA=変格; VNEG=否定動詞

[3] 分析の基礎資料として、フィンランドの週刊誌 *Suomen Kuvalehti* の 1987 年の記事全文を電子化したコーパス (総語数約 120 万語) を用いた。このコーパスの使用を許可して頂いたヘルシンキ大学一般言語学科に感謝する。このコーパスから得られた例文には、**sk-**[ファイル番号]**:**[行番号] という形で出典を記載する。紙幅の都合上、正しく理解できる範囲で原文を簡略化することがある。

のどれに属するかが不明瞭な動詞について、「他動詞+第 3 不定詞」構文に動詞に依存しない固有の 3 つの用法を想定することで、そのふるまいが予測できることを論じる。

「他動詞+第 3 不定詞入格」構文をとりうる動詞として、Penttilä (1963[2]:405) ではおよそ 70、Vilkuna (1996:268) では 19、また Jönsson-Korhola & White (1997) では 42 の動詞が挙げられている。しかし、今回用いたフィンランド語のコーパスで、この構文の主動詞として実際に現れた動詞の数は、先行研究のリストを大きく上回り、異なり語数で 180 種あまりあった (cf. Siro 1964:108)。また、「他動詞+第 3 不定詞入格」構文の用例は約 1400 例得られた。

1 「他動詞+第 3 不定詞入格」構文に現れる他動詞のタイプ

入格という名詞につく格語尾をとることからもわかるように、第 3 不定詞は名詞的な性質を持っていることが知られている (Siro 1964:108)。以下の例文 (2) では、第 3 不定詞入格と入格名詞句 (*kauppa-an* 'into the shop') とが同格で置かれている。

(2) ***Lähet-i-n*** *Liisa-n* *kauppa-an* *osta-ma-an* *ruoka-a.*
send-IMP-1SG リーサ-ACC shop-ILL buy-3INF-ILL food-PAR
「私はリーサに店へ食べ物を買いに行かせた」 (Jönsson-Korhola & White 1997:78)

しかし、主動詞と第 3 不定詞との関係は、必ずしも主動詞と入格相当の名詞句とのそれに還元することはできない。第 3 不定詞入格は、共起する主動詞と単なる入格名詞句以上に密接な関係をもつことがある。

この章では、テストケースとして、この構文をとり、一定の統語的意味的特徴をもつことが知られている 2 つの主要な動詞グループと、これまであまり注目されていない、ふるまいを異にするもう 1 つの動詞グループについて、それぞれのデータを比較対照する。

1.1 他動詞の主要 3 タイプ

まず、「他動詞+第 3 不定詞入格」構文をとる動詞で重要なのは、「依頼」や「援助」を表す動詞 (cf. Setälä 1973[16]:115) で、このグループを仮にタイプ A と呼ぶことにする (例文 (3–4))。

(3) *Äiti* ***autto-i*** *las-ta* *puke-ma-an* *vaattee-t* *päälle-en.*
mother.NOM help-IMP.3SG child-PAR put on-3INF-ILL clothes-ACC.PL on-PX3
「母親は子供が服を着るのを手伝った」(Hakulinen & Karlsson 1979:384)

(4) *Tarkastaja* ***pyy-si*** *matkustaj-i-a* *näyttä-mä-än* *lippu-nsa.*
inspector.NOM ack-IMP.3SG passenger-PL-PAR show-3INF-ILL ticket-ACC.PX3
「検札係は乗客に切符を見せるよう頼んだ」(*ibid.*)

コーパスの用例中比較的頻度が高かった動詞は *autta-a* 'help' (60 例)、*kehotta-a* 'urge' (63 例)、*käske-ä* 'order' (14 例)、*neuvo-a* 'advise' (16 例)、*painosta-a* 'press' (10 例), *pyytä-ä* 'ask' (95 例), *vaati-a* 'demand' (48 例) である。

次に、「使役」を表す動詞グループがあり、これをタイプ B の動詞とする。このグループに属するのは *pan-na* 'put' (90 例) と *saa-da* 'get' (352 例) の 2 つである。この 2 つの動詞の用例だけで「他動詞+第 3 不定詞入格」構文の全用例中 3 分の 1 を占める。

(5) *Hän* ***sa-i*** *meidä-t* *suostu-ma-an.*
(s)he get-IMP.3SG we-ACC agree-3INF-ILL
「彼 (女) はわれわれを同意させた」(Vilkuna 1996: 272)

タイプ A、B の動詞はともに、典型的には有生の主語、目的語をとる [4]。これに対し、目的語として有生の指示対象をとらない他動詞でも、第 3 不定詞をとることがある。これをタイプ C の動詞と呼ぶ。頻度の高いものには、*asetta-a* 'settle' (21 例)、*halu-ta* 'want' (9 例)、*käyttä-ä* 'use' (7 例)、*tarvi-ta* 'need' (12 例) など、また頻度が低いが *julkais-ta* 'publish', *luo-da* 'create', *muodosta-a* 'form', *ohjelmoi-da* 'program', *perusta-a* 'found', *rakenta-a* 'build', *suunnitel-la* 'plan', *teh-dä* 'make' などがコーパスから見つかる。このタイプの動詞に関しては、従来の研究では殆ど触れられていない。

(6) ***tarvi-taan*** *paljon* *rehellisyy-ttä* *selittä-mä-än* *miksi* *vielä-kin* *elä-mme* [...]
need-PASS much honesty-PAR explain-3INF-ILL why still-& live-1PL
「多くの誠実さが、なぜ我々がまだ生きているのかを説明するのに必要だ」(sk-16:1609)

(7) [...] *sampanja=pullo* ***ol-i*** ***korka-ttu*** *onnittele-ma-an* [...]
champagne=bottle.ACC be-IMP.3SG open-PASS.PSPT congratulate-3INF-ILL
「(当選を) お祝いするためにシャンパンが開けられた」(sk-12:394)

1.2 タイプ A とタイプ B の比較

タイプ A、B の動詞を主動詞とする「他動詞+第 3 不定詞入格」構文は、いくつかの対照的なふるまいを示す。

相違点 1：タイプ B の動詞がこの構文をとって現れた場合、動詞自身のもつ、目的語の指示対象の物理的な移動の意味が失われる。例文 (8a) の主動詞 *pan-na* 'put' は、例文 (8b) のそれがもつ「置く」という意味をもはや持たず、より抽象的な使役の関係を表している (cf. Kemmer & Verhagen 1994)。

(8) a. *Äiti* ***pan-i*** *poja-n* *pyytä-mä-än* *anteeksi.*
mother.NOM put-IMP.3SG boy-ACC ask-3INF-ILL sorry
「母親は少年を謝らせた」(*Perussanakirja*, 見出し語 *panna* の項)

b. *Pan-i-n* *kirja-t* *kassi-in.*
put-IMP-1SG book-ACC.PL bag-ILL
「私は本を買物袋に入れた」(Jönsson-Korhola & White 1997:101)

相違点 2：タイプ A は、大多数の用例が分格目的語をとる [5]。これに対しタイプ B の目的語は (他の条件[6] により分格が要求されない限り) 対格で現れる。

[4] ただし、タイプ B には無生の主語、目的語が現れうる (§1.2 を参照)。また、タイプ A の動詞 *auttaa* 'help' には無生主語の用例がある。無生主語の問題に関しては、本発表では詳しく触れない。

[5] Jönsson-Korhola & White (1997) では、第 3 不定詞と分格目的語をとる他動詞として、5 つの動詞が挙げられている。Hakulinen & Karlsson (1979:384) は、このタイプが「常に有生目的語と第 3 不定詞入格を要求する」語彙的に限られたグループであることを示唆しているが、どの動詞が分格目的語をとるか、また分格をとる傾向がどの程度一貫しているのかは議論の余地がある (§2 参照)。

[6] フィンランド語では、目的語の格形として、分格と対格の 2 つが存在する。目的語の指示対象の性質や、否定極性をもつ要素の存在など、環境によって対格と分格の区別が中和され、分格のみが現れる。また、動詞の表わす行為が完結していないことを表すマーカーとして分格が用いられる場合もある (cf. §2)。

相違点 **3**：第 3 不定詞の表わす行為の達成が含意されるかどうかに関し、解釈が異なる (cf. Shibatani 1976)。

(9) *Minä* { ***pyy-si-n*** / ****sa-i-n*** } *hän-tä* *luke-ma-an,* *mutta*
I.NOM ask-IMP-1SG get-IMP-1SG (s)he-PAR read-3INF-ILL but
hän *ei* *suostu-nut.*
(s)he.NOM VNEG.3SG agree-PSPT
「私は彼 (女) に { 本を読むよう頼んだが/*本を読ませたが }、彼 (女) は読もうとしなかった」(作例)

相違点 **4**：タイプ B の動詞には、無生の目的語が現れることができる。

(10) *eräs* *järjestäjä* ***pan-i*** *vahingo-ssa* *väärä-n* *musiiki-n*
certain organizer.NOM put-IMP.3SG accident-INE wrong-ACC music-ACC
soi-ma-an *erää-seen* *kohtaukse-en.*
sound-3INF-ILL certain-ILL scene-ILL
「主催者の一人が、ある場面にうっかり間違った音楽を鳴らした」(sk-46:952)

1.3 タイプ A、B とタイプ C の比較とその解釈

上述の相違点と同時に、A、B の 2 つのタイプの動詞には共通する性質がある。主語、目的語ともに有生名詞がくることが典型的であることは既に述べた。タイプ C の動詞をタイプ A、B の動詞と比較することで、タイプ A、B にはない、タイプ C の 2 つの特徴が明らかになる。このことは、タイプ A、B のみの分析で見落とされてきた、タイプ A、B の隠れた特性を明らかにする。

第一に、フィンランド語では、不定詞句は主動詞の後ろに置かれるのが普通であり (Vilkuna 1996:276)、「他動詞+第 3 不定詞入格」構文の場合も、タイプ A、B の動詞が主動詞の場合には不定詞句の前置は起こらない。しかし、比較的少数ながら、タイプ C の動詞に関しては、不定詞句が主動詞の前に出ている用例が見つかる。

(11) [*ura-a* *tasoitta-ma-an*] *hän* ***sa-i*** [7] *50000* *marka-n*
career-PAR level-3INF-ILL (s)he.NOM get-IMP.3SG mark-GEN
stipendi-n
scholarship-ACC
「キャリアを積むために彼 (女) は 50000 マルッカの奨学金をもらった」(sk-36:1531)

(12) [*Koivisto-n* *sosialistis-ta* *tausta-a* *tasapainotta-ma-an*]
コイヴィスト-GEN socialist-PAR background-PAR balance-3INF-ILL
tarvi-ttaisiin *porvarillinen* *pääministeri.*
need-PASS.COND bourgeois prime minister-NOM
「コイヴィストの社会主義的背景とのバランスをとるためにはブルジョワ出身の首相が必要だろう」(sk-01:626)

実際の用例は少ないものの、タイプ C の動詞の場合、基本的には不定詞句を主動詞の前に移動することが可能である。このことは、タイプ C の動詞と現れる不定詞が、名詞句と同じように扱われていることを示している。これは逆に言えば、タイプ A、B の動詞の場合、構文の主要構成要素である主動詞、不定詞の語順が固定化されていることを意味する。

[7] この用例中の動詞 *saa-da* は、タイプ B のそれではなく、'get' の意味で用いられていることに注意。

第二に、タイプCの動詞の場合、第3不定詞として共起する動詞の種類に興味深い制限がみられる：多くの用例で第3不定詞として現れるのは他動詞であり (上記の例を参照)、動詞によっては自動詞、特に再帰的な意味をもつものは出ることができない。

(13) **Te-i-n* *pommi-n* *räjähtä-mä-än.*
make-IMP-1SG bomb-ACC explode-3INF-ILL
「私は爆弾を爆発させるよう作った」(作例)

(14) *Isä* ***tek-i*** *reiä-n* { *maa-han* / **pienene-mä-än* }.
father.NOM make-IMP.3SG hole-ACC ground-ILL get smaller-3INF-ILL
「父親は地面に穴を掘った/*穴を小さくした」(作例)

このことから、タイプCの動詞が第3不定詞をとって現れる場合、目的語の指示対象は常に「道具」として扱われ、それ自身に変化をもたらすことができないと考えることができる。これに対し、タイプA、Bの動詞は、目的語の指示対象が自ら意思を持って行為を遂行するかどうかを判断すること (タイプA) や、目的語の指示対象がある行為を行なうことが含意されていること (タイプB) によって、自らに変化をもたらすような行為を表す動詞を第3不定詞としてとることを可能にしていると考えられる。

2 「他動詞+第3不定詞入格」構文がもつ3つの用法

これまで、「他動詞+第3不定詞入格」構文をとる動詞として3つのタイプの動詞を取り上げ、それぞれの場合にこの構文の用法がどのように異なるかを考察してきた。しかし、この構文の主動詞として現れた他動詞には、これら3つのタイプのいずれにもはっきりと分類できない多くの動詞が存在する。

実際には、上述の3つのタイプに属する動詞でさえ、上で挙げた諸特徴に関し常にカテゴリカルにふるまうわけではない。例えば、タイプAとした動詞は、殆んど常に分格目的語をとる (222例) ものの、コーパスからは5例 (2.2% [8]) の対格目的語をとる用例が得られる。以下は動詞 *pyytä-ä* 'ask' の例である。

(15) [...] *ministeri-n* *sihteeri* ***pyytä-ä*** *jonkun* *tule-ma-an*
minister-GEN secretary.NOM ask-3SG someone.ACC come-3INF-ILL
kolmante-en *kerrokse-en*
third-ILL floor-ILL
「大臣の秘書は誰かに (その人自身が)3階に来るように頼む」(sk-45:937)

このことは、動詞のタイプ毎に見てきた構文の用法が、かなりの程度動詞の種類に依存しながらも、実際には動詞とは独立して存在すると考える根拠となる。このことを考慮し、「他動詞+第3不定詞入格」構文の用法をまとめると以下のようになる。

用法A：主語の表す有生の対象が、目的語の指示する有生の対象に対し、第3不定詞入格で表される行為の遂行を働きかけることを表す。

用法B：主語の表す (有生/無生の) 対象の働きかけの結果、目的語の指示する対象が第3不定詞入格で表される行為を遂行することを表す。

用法C：主語の表す対象が、目的語の指示する対象を (道具として) 利用して、何かを行なわせるために、目的語の指示対象に働きかけることを表す。

[8] 目的語が省略されている例 (79例) を除いて算出している。

このように構文の用法を再解釈することで、動詞タイプA、B、Cのいずれにもはっきりとはあてはまらず、かといって独自のタイプを形成しているともいえない動詞のふるまいを以下のように予測できるようになる。

- 目的語に有生、無生名詞のどちらでもとることができ、空間的に対象を移動させる動詞 (e.g. 例文 (1), 動詞 *lähettä-ä* 'send') が、用法B、Cのどちらに解釈されるかをかなり的確に予想できる (例文 (16))。第 3 不定詞として他動詞が現れる場合、用法Cのような解釈をとりやすい。有生名詞が目的語として現れる場合、または第 3 不定詞入格に自動詞が現れる場合には、用法 B の解釈をとりやすい。

- 「命令」「教育」のようなタイプAに近い意味をもつ動詞の目的語の格の交代を説明できる。働きかけている途中であれば用法A、働きかけが完結し、目的語の指示対象の行為が遂行されれば用法 B の解釈がなされ、前者は分格、後者は対格目的語が出る (例文 (17) vs. (18), cf. Vilkuna 1996:272)。

(16) *Ruotsi-n* *kiele-n* *taito-j-a* *ei* *saa* ***päästä-ä***
Swedish-GEN language-GEN skill-PL-PAR VNEG.3SG may let go-1INF
ruostu-ma-an
rust-3INF-ILL
「スウェーデン語の知識を錆びつかせてはならない」(sk-44:2013)

(17) *Kansa* ***on*** ***opete-ttu*** *luotta-ma-an* *viranomais-i-in*
people.NOM be.3SG teach-PASS.PSPT trust-3INF-ILL authority-PL-ILL
「人々は政府を信用するように教育されている」(sk-09:1469)

(18) *Samuli* ***opett-i*** *vaimo-a-an* *aja-ma-an* *pyörä-llä,* *juoks-i*
サムリ.NOM teach-IMP.3SG wife-PAR-PX3 drive-3INF-ILL bicycle-ADE run-IMP.3SG
pyörä-stä *kiinni* *pitä-en.*
bicycle-ELA fast hold-2INF
「サムリは妻に自転車に乗ることを教え、自転車を支えながら走った」(sk-40:1129)

参考文献

Hakulinen, Auli and Fred Karlsson 1979 *Nykysuomen lauseoppia.* Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Jönsson-Korhola, Hannele & Leila White 1997 *Tarkista tästä.* Helsinki: Edita.

Kemmer, Suzanne & Arie Verhagen 1994 "The grammar of causatives and the conceptual structure of events" *Cognitive Linguistics* 5: 115–156.

Penttilä, Aarni 1963[2] *Suomen kielioppi.* Porvoo, Finland: Werner Söderström.

Perussanakirja = Haarala, Risto (Editor in Chief) 1990–1994 *Suomen kielen perussanakirja.* Helsinki: Kotimaisten kielten tutkimuskeskus.

Setälä, E[mil] N[estor] 1973[16] [1880] *Suomen kielen lauseoppi.* (editted by Sadeniemi, Matti) Helsinki: Otava.

Shibatani, Masayoshi 1976 "The grammar of causative constructions: A conspectus" In Shibatani, Masayoshi (ed.) *The Grammar of Causative Constructions.* Syntax and Semantics 6. New York: Academic Press. pp.1–40.

Siro, Paavo 1964 *Suomen kielen lauseoppi.* Helsinki: Tietosanakirja.

Vilkuna, Maria 1996 *Suomen lauseopin perusteet.* Helsinki: Edita.